

辻邦生が見た 20 世紀末

標題の書は信濃毎日新聞社から 2000 年 7 月に刊行された。半年近く前に本書を知り、名大中央図書館で手にしたのは、あるジャーナリストのメールからだ。そのジャーナリストが急逝した。残念でならない。これについては、すこし先に書くつもりだ。その前に、この本を紹介しておきたい。



冒頭に、評論家の加藤周一さんが「辻邦生の詩と真実」と題して、本書の「序文」を書いている。味のある「序文」なので紹介したい。

1930 年代に東京の都心の小学校に通っていた子供の両親が郊外に移転した。しかし子供はどうしても転校する気になれず、その後も長い距離を電車で同じ小学校へ通いつづける。なぜ転校する気になれなかったのか。「友達や、校庭のえの木の大木や、一ツ木通りの賑わいや、町の雰囲気が好きだった」（「小学校が消滅する日」、1992）からである。それは小学生の好みとして必ずしも珍しいことではないだろう。しかしその好みを転校の拒否として貫くのは、それを受け入れた両親の態度と共に、よくあることではない。その子供が成人しても、友達や樹木や町の雰囲気を、世間や権力や金もうけより尊重しつづけるとすれば、さらに稀なことにちがいない。彼はいつか詩人になり、いつか『西行花伝』を書く辻邦生になるだろう。

30 年代の小学生は、40 年代に中学生になり、高校（旧制）に進み、世の中が「撃ちてしまん」と叫んでいたとき、戦争と戦争イデオロギーに反対していた（「信州に学んだころ」、1990）。戦争は友達を殺し、樹木を切り倒し、町の雰囲気を破壊するからである。戦後日本の「スローガン」は「撃ちてし止まん」から平和主義へ急転し、平和主義から再転して武装強化へ向かう。しかし辻邦生は変わらなかった、一というよりも彼には変わる必要がなかった。

戦後の辻は、東京で磯崎新夫妻のような芸術家や中村眞一郎のような文学者の友達と交わり、軽井沢の森のなかで樹木を愛し、パリやイタリアの町の雰囲気を好んで、古代ローマや中世日本の、広い意味での詩人を主人公とした歴史小説を書くことを業としていた。そういう日本の詩人・小説家が、1990 年代の、すなわち 20 世紀最後の 10 年間の、歴史的な事件や身近の日常的な出来事に、どう反応していたか。それを要約するのが、この本である。

辻邦生は 1990 年 8 月から 1999 年 7 月まで、毎週金曜日に「今日の視角」と題して短い文章を「信濃毎日新聞」に寄稿していた。それが中断されたのは、99 年 7 月 29 日に

著者が急逝したからである。その「今日の視角」433回のすべてがここにある。

90年代は「冷戦」後最初の10年間である。ソ連邦が解体し、東西ドイツの統一とヨーロッパ統合の進展がそれに続いた。残された唯一の超大国は、「国際軍」を率いて湾岸戦争をおこし、「北大西洋条約軍」に号令してユーゴスラヴィアを爆撃した。「国際軍」の行動は国連の委託により、「北大西洋条約軍」の戦争は国連安全保障理事会の無視による。そのどちらの結果も公表された戦争目的の達成から遠かった。日本では政府が戦争を批判せず、「新防衛指針」関連法をつくって、将来の戦争へ参加の道をひらいた。世界にとっても日本にとっても劃期的なこういう事件に対し、日本の一人の小説家がとった態度を、読者はこの本のなかに見ることができる。

戦後の半世紀を生きた辻邦生は、しばしば軍国日本の「悪夢」（「太平洋戦争の映像を見て」、1991）を思い出していた。日本人は変わったのだろうか。「あのとき日本人は12歳、といわれたが、今は大人になったのだろうか」（同上）と。おそらくこの問いは今後も問われつづけ、おそらくこの本は、辻の生涯を越えて、はるかに長く生きつづけることになるだろう。

(2017年10月21日)